和鉄の道 2015【11】

「伊弉諾神宮 国生み神話の島」淡路島で大量の埋納銅鐸出土【2】 2015.7.1.

その後の地元紙　神戸新聞の報道から　かいま見える弥生時代の淡路島

南淡路でみつかった埋納銅鐸　松帆銅鐸（弥生時代前期末～中期前半）

南淡路で見つかった最古級の銅鐸　その位置づけが注目されている。　この松帆銅鐸の性格や位置づけについて、新たに分かったことなどを含め、地元紙　神戸新聞に引き続き報道されているので、そのまま転記してご紹介。

弥生時代　集落から地域集団・国へと大きな集落社会変革・国づくりが進む過程で、弥生時代の末期　邪馬台国連合・初期大和を持ち出す前のの時代に有力な勢力が居なかったといわれてきた淡路でも　着々と国づくりが進んできた様子が垣間見える。

2015.7.1.　by Mutsu Nakanishi

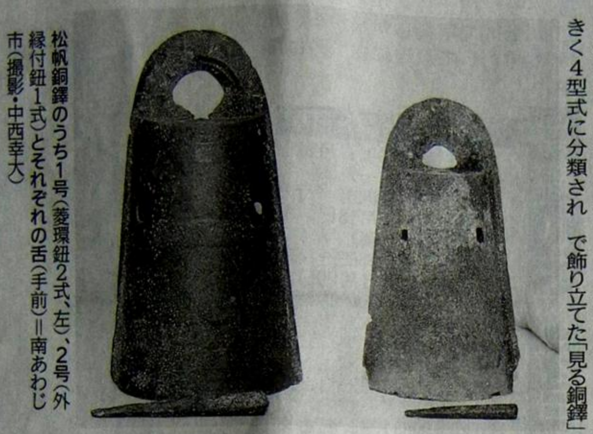
◆　６月１９日　　神戸新聞　１８面　　森岡秀人インタビュー記事より

南あわじで発見の「松帆銅鐸」

埋納時期 最古の初例か？

南あわじ市で見つかった「松帆銅鐸」（7個）。古い型式（弥生時代前期末～中期前半）のみが多数出土する希少な発見が、銅鐸の埋められた時期について再考を迫っている。従来の「2段階埋納説」を進め、松帆銅鐸を第1段階とする「多段階埋納説」を唱える、森岡秀人・芦屋市教育委員会学芸員に聞いた。（まとめ・田中真治）

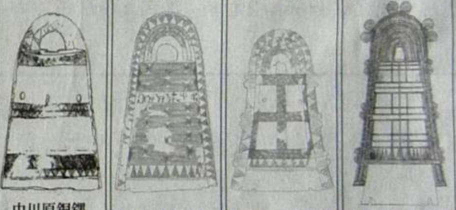
森岡秀人・芦屋市教委学芸員に聞く



松帆銅鐸のうち1号（菱環鈕2式、左）、2号（外縁付鈕1式）とそれぞれの舌（手前）＝南あわじ市（撮影・中西幸大）

銅鐸の型式と年代観

型式		弥生		淡路・松帆	島根・荒神谷	神戸・桜ケ丘	島根・加茂岩倉	滋賀・大岩山	
Ⅰ 菱環鈕式（りょうかんちゅう）	1式	前期	紀元前3~2世紀		1			（2個不明）	聞く銅鐸
	2式			1	1				
Ⅱ 外縁付鈕式（がいえんつきちゅう）	1式	中期	前2世紀	6	4	2	19		
	2式		前1世紀			2	9		
Ⅲ 扁平鈕式（へんぺいちゅう）	1式		前1～後1世紀初頭			1	2		
	2式					9	9		
Ⅳ 突線鈕式（とっせんちゅう）	1式	後期	後1世紀					4	見る銅鐸
	2式		後1世紀後半～2世紀					5	
	3式							12	
	4式								
	5式		後2世紀末まで					1	
			計	7	6	14	39	24	



Ⅰ 菱環鈕式　中川原銅鐸（淡路）　Ⅱ 外縁付鈕式　桜ケ丘１号銅鐸　Ⅲ 扁平鈕式　桜ケ丘11号銅鐸　Ⅳ 突線鈕式　大岩山１号銅鐸

（南あわじ市教委、神戸市桜ケ丘銅鐸・銅戈調査報告書、世界考古学大系より）

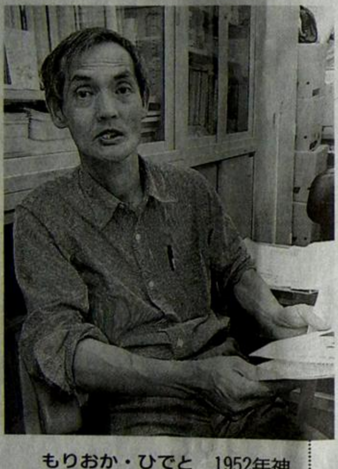
「2段階説」さらに細分化を

銅鐸は鈕（つり手）の形態などの特徴から大きく4型式に分類される。音を鳴らす実用的な「聞く銅鐸」から、大型で飾り立てた「見る銅鐸」へと変化した。集落や墓から離れた山腹などに埋められ、工事中などに偶然見つかることが多い。これまで500個以上の出土例があるが、多数出土は珍しい。

■社会的変動

銅鐸は祭器であり、大きな集落が1個ずつ持っていたと考えられてきた。

明治～昭和にかけて滋賀・大岩山で計24個が出土。神戸・桜ケ丘で1964年に14個が発見されたことから、集落の統合により持ち寄った銅鐸が一括埋納されたと、神戸出身の故小林行雄・京大名誉教授は解釈した。



もりおか・ひでと　1952年神戸市灘区生まれ。関西大在学中から高松塚古墳などの発掘に参加する。「神戸・阪神間の古代史」（神戸新聞総合出版センター）ほか共著、論文多数。日本考古学協会前理事。古代学研究会代表。芦屋市在住。

文化 BUNKA

当初は、古墳時代に移る弥生末の社会変動に伴い、一斉に埋められたとの見方だった。だが、弥生中期末～後期初めにもあったとする「2段階埋納説」が70年代半ばから支持を集めるようになる。

この時期（弥生中期末～後期初め）の近畿地方は、石器から鉄器への移行などによる社会構造の大変換期。平野部の大規模集落が解体、それまでの「聞く銅鐸」が役割を終えた―と推測されるからだ。

96年には島根・加茂岩倉で39個の大発見があり、それまでの大量出土例を踏まえると、古い段階と新しい段階の銅鐸が一緒に埋められることはないことが浮かび上がる。このことも、2段階埋納説の裏付けとなった。

■原初的方式

松帆銅鐸は島根・荒神谷（6個）と同様、最古段階の「菱環鈕式」の銅鐸を含むセットという点が重要だ。

桜ケ丘や加茂岩倉より古い型式のセットであり、弥生中期前半（紀元前2世紀）、2段階説より早い時期に埋納された可能性を示唆する。松帆銅鐸は埋納の第1段階となるのではないか。

松帆銅鐸からは、音を鳴らすための青銅製の舌（振り子）が出てきた。銅鐸の大半は舌を欠いた状態で見つかっており、異例。より古い、原初的な埋納方式と見ることができる。

埋納段階はさらに細分化が可能だと考えられる。第2段階（弥生中期末）は桜ケ丘や加茂岩倉、銅鐸と九州製の銅矛が一緒に出土した荒神谷などがあたる。弥生後期も2～3段階に分けるべきだろう。

弥生社会の集落社会については、小刻みな変動が分かってきた。「ムラからクニへ」という単線的な説明は見直される必要がある。銅鐸を社会との関係からとらえた研究の進展が期待される。

◆　６月２７日　土曜日　神戸新聞　１面

CT で判明した新事実　「銅鐸すべてに『舌』全国初　　使用時のまま埋納か」　より

南あわじで４月発見

銅鐸の中に「舌」全国初

CTで判明　使用時のまま埋納か

南あわじ市で出土した弥生時代前期末〜中期前半（紀元前3〜前2世紀）の「松帆銅鐸」7個のうち、大型に小型をはめ込んだ「入れ子」状態にある2組4個から、音を鳴らす振り子「舌」4本が見つかった、と兵庫県教育委員会などが26日、発表した。奈良文化財研究所（奈良市）でのコンピューター断層撮影（CT）スキャンで判明。舌を銅鐸内に収めた状態が初めて分かった。謎が多い銅鐸の使い方などを解明する極めて貴重な資料になる。

（31面に関連記事）

㊤コンピューター断層撮影による銅鐸２組の３次元画像。入れ子の外側と内側の銅鐸内に棒状の舌（彩色部分）がある（奈良文化財研究所提供）㊦コンピューター断層撮影を行った２組の銅鐸（撮影・中西幸大）

松帆銅鐸は、今年4月に玉砂利製造販売会社の加工場や砂置き場で発見され、内部に砂が詰まったまま回収した2組4個をCTで調べた。既に発見された舌3本を合わせ、7個全てに舌があったことになる。

新たに見つかった舌は、それぞれセットとなる銅鐸内にあり、同研究所の難波洋三・埋蔵文化財センター長は「舌をひもで取り付けた使用状態のまま、入れ子にして埋めた可能性が高い」と推測する。舌は青銅製とみられ、打ち鳴らしたことによる摩滅も確認できた。

今後、砂を取り出し、詳しく調べる。

これまで銅鐸は全国で500個以上出土しているが、舌の出土数はその1割にも満たない。うち銅鐸とセットで出土したのは、鳥取県の「泊銅鐸」と南あわじ市の「中の御堂銅鐸」しかない。

銅鐸の埋納方法をめぐっては、音を出す祭器の機能を奪うため舌を外す決まりがあったとするのが定説だが、「舌を外さない埋納が南あわじ周辺の地域色とみられ、地元の勢力が埋めた可能性が高い」と難波センター長は指摘している。

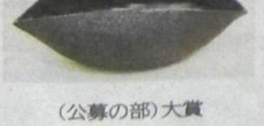
入れ子の内側の銅鐸はいずれも、2番目に古い型式段階の「外縁付鈕1式」だった。

松帆銅鐸の公開が7月14日〜8月16日、南あわじ市松帆西路の滝川記念美術館「玉青館」で。実物3個とCT画像のパネルを展示する。同市埋蔵文化財調査事務所☎0799・42・3849（月－金曜）（田中真治）

NEXTに動画

舌（ぜつ）　祭器である銅鐸内につり下げられた青銅製の棒で、開口部付近の環状突起（突帯）に当たることで音を鳴らす。青銅のやじりの転用や石製のものもある。国内の出土例は少なく、青銅製は約10個。大型で飾り立てた弥生後期の銅鐸には、突帯の摩滅がなく、舌がなかったと推測されるものもある。

第53回
兵庫工芸展
彼谷　利彬
乾漆花器　割れあけび



（公募の部）大賞
あすまで県民アートギャラリー

◆　６月２７日　土曜日　神戸新聞　31 面より

松帆銅鐸　全てに「舌」　弥生人　祭器鳴らし豊作祈願?　「聞く銅鐸」浮かぶ実像

弥生人 祭器鳴らし豊作祈願?

「聞く銅鐸」浮かぶ実像

松帆銅鐸 全てに「舌」

南あわじ市の「松帆銅鐸」2組4個のコンピューター断層撮影（CT）スキャンは、内部に音を鳴らす振り子「舌」を収めた状態を明らかにし、「聞く銅鐸」の実態を科学的に裏付けた。古い銅鐸が多く見つかっている淡路島。松帆銅鐸がつくられた弥生時代前期末～中期前半（紀元前3～前2世紀）、同市内には農耕を営む集落があった。祭器とされる銅鐸を打ち鳴らし、人々は豊作を祈ったのだろうか。（1面参照）

コンピューター断層撮影で、内部に「舌」が収まっているのが確認された2組4個の銅鐸。中に砂が詰まっている＝奈良市佐紀町、奈良文化財研究所（撮影・中西幸大）

	名称(伝)は出土地伝承	保管場所
1	中川原銅鐸	隆泉寺(南あわじ市)
2	中の御堂銅鐸(8個出土説あり)	日光寺(南あわじ市) ※現存は1個のみ
3		
4		
5	慶野銅鐸	淡路文化史料館(洲本市)
6	淡路国出土銅鐸(伝)	本興寺(尼崎市)
7	倭文銅鐸	東京国立博物館
8	中条銅鐸	不明
9	淡路川出土銅鐸(伝)	辰馬考古資料館(西宮市)
10	淡路島出土銅鐸(伝)	辰馬考古資料館(西宮市)
11	幡多銅鐸	不明
12	地頭方銅鐸	不明
13	賀集福井銅鐸	不明
14	新田南銅鐸	不明

断層撮影1ミリ単位 内部再現

2組4個には砂が詰まっていた。そこで、医療用CTより高エネルギーのエックス線で金属内部を透視できるCT装置を活用。4日かけて銅鐸を1ミリ単位で断層撮影し、画像計600枚以上から3次元画像を構築し、内部を再現した。

舌を伴うことが分かった銅鐸。つくられたころ、人々は―。

一帯に広がる三原平野。当時の大規模集落跡として「井手田遺跡」（同市阿万上町）、「神子曽遺跡」（同市賀集鍛治屋）がある。

前者から20を超える竪穴住居跡、水田跡、和歌山産の弥生土器などが出土。後者では墓も確認した。周辺の遺跡から漁網に使う土のおもりも出土し、南あわじ市教育委員会の定松佳重さんは「稲作を営む農耕社会で漁労もしていた」と推測する。

銅鐸の鳴らし方（想像図）

初期の銅鐸は松帆銅鐸のような「聞く銅鐸」、いわば楽器の一種だった。農耕祭祀で使われ、木などにつるし、本体または中の舌を揺らし鳴らした―と考えられる。2個ずつ入れ子状に埋められていたため、「二つセットで鳴らしたのかも」と想像する関係者も。

難波洋三・奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長は、銅鐸と舌をセットで埋める特異性に注目し「埋めたのは淡路の地域勢力だった可能性がある」。

同市松帆地区では今回発見の7個以外に、江戸前期に8個出土の伝承記録がある。同地区の古津路で銅剣14本も見つかったが、大量の青銅器を集められるほどの勢力の存在は知られていない。

難波センター長は「当時の淡路は、西から近畿への文化の入り口。有力集団がいたことを示す遺跡が将来、見つかるかもしれない」と期待する。（堀井正純）

入れ子状2組〝謎の宝庫〟

7個全てが舌を持つ異例の発見となった「松帆銅鐸」は、弥生人の儀礼の謎を解明する、さらに多くの手がかりを与えてくれそうだ。

CT画像で分かった舌4本はそれぞれ、銅鐸の内部上面に接する奥にあり、舌をつるしたひもで引っ張り上げ埋めたと推測できる。

ひもは腐食してなくなるが、銅に接した部分はさびによって残る可能性があるという。ひもが確認されれば初めての例で、素材や、舌をどのようにぶら下げていたかが明らかになると期待を集める。

セットとなる銅鐸と舌の大きさが比例することもはっきりした。

その場合、一つだけ入れ子状態でなかった銅鐸（5号）とセットとみられた舌は、少しサイズが長い。この銅鐸を入れ子にした8個目の銅鐸があった―との見方も成り立つ。

表面の傷から、同じ鋳型で作られた「兄弟銅鐸」の存在も予想されている。洗浄で特徴が鮮明になれば、産地や地域間の交流が判明する可能性もある。

松帆銅鐸	高さ	舌の長さ	備考
1号	26.6cm	13.0cm	
2号	22.4cm	8.0cm	1号内に入れ子
3号	31.5cm	約12.8cm	
4号	約22.6cm	約8.3cm	3号内に入れ子
5号	23.8cm	(仮)12.0cm	破損
6号	31.8cm	約13.2cm	
7号	約21.1cm	約8.0cm	6号内に入れ子

□はCT調査分

儀礼様式解明へ膨らむ期待

銅鐸左右の装飾部の「ひれ」を水平にする異例の埋納状態だった可能性も浮上した。

これまでの出土例から、ひれは垂直に立てるのが通常とされる。だが今回のCT画像の舌の傾きや銅鐸の位置は、水平に埋まっていたことを示す。不安定な砂地で埋納後に動いたとも考えられ、砂の分析が課題。砂を詰めて埋納したのかどうかも注目される。

特異点の多い松帆銅鐸こそ「埋納の本来の形ではないか」と兵庫県教育委員会文化財課はみる。埋納の時期や意味をめぐり、議論を呼ぶことは間違いない。（田中真治）